

MAIL MAGAZINE

メールマガジン

「思い出すシリーズ～2012年河北省編～」

JSC 貿易部ニュース 中国編



諸般の事情により、中国への渡航が困難な状況になっておりますが、いくら我々が「メルマガのネタ切れです！」と訴えても、編集長からの出稿プレッシャーに変化の色はなく困り果てていたところ、ふとテレビを見やると、こちら

も新しい番組収録の目途が立たず“総集編”“再放送”的オンパレードであります。思わず膝を叩いてこれをヒントに我々も過去の渡航記を再構成してお茶を濁そう、もとい中国の出張風景の一端をご覧頂こうという企画であります。

「思い出すシリーズ」、御笑覧ください。

いつもお世話になっております。当メルマガに目を通して頂いてありがとうございます。今回より2012年12月に中国の内陸部を回った時の模様を、数回に分けてお届けする予定です。

～・～

以前より計画していた、河北省からスタートして中国の内陸部数か所を巡る丁場視察の出張。メンバーは取引先公司のウーさん、工場社長のスーさん、弊社社員のワンさん、そして私4名になります。

スー社長は、今回見に行く石を得意としており、一年のうち半分程度は鉱山近くの街に滞在する原石の達人。採掘された石を検品しながら年中福建省と河北省を行き来しているそうです。心強い同伴者を得ました。

前段階として、行程の打ち合わせを行います・・・

ウーさんから、「河北省スタートの出張の件ですが、こんな感じで10日間の日程組むので、Mさん（わたし）は直接“石家庄”のホテルまで来てください。そこで待ち合わせしましょう」と告げられます。初めて行く土地ということで一抹の不安が頭をよぎりますが、「まあ、いつも行く廈門でも飛行機降りた後は一人でホテルまで行っているし問題ないか」と自分を納得させ、安易に承諾してしまいます。



今回の出張は、中国国内だけで全行程約5000kmの移動距離です。

大阪から河北省・石家庄までの直行便はありませんので、経由地の上海浦東空港（新空港）で一旦入国手続きをし、上海虹桥空港（旧空港）まで移動をしてから石家庄行きの国内線に乗り込みます。

午前中に家を出たはずが上海での乗り継ぎ時間が長かったせいもあり、最初の目的地である石家庄空港に着いた時には、すでに深夜12時を回ろうとしています。

予定通り出迎えはありませんので、自分でタクシーを探そうと空港の外に出ますが、もちろんすでに真っ暗。空港というより少し大きな駅という風情で、おそらく日本人は私一人。赤いシャツを着たタクシーの呼び込み兄ちゃんに誘われ、「これは白タクだらうなあ～」と思いながらも、他を見渡しても正規っぽいタクシーもなさそうなので、意を決してトランクを持ち、タクシーに乗り込みます。

私「石家庄の〇〇ホテル、わかる？」、運転手「わかるよ」、私「運賃いくら？（白タクなのでメーター制ではなく事前に運賃を決める）」、運転手「〇〇元でどうだ？」、私「OK、領収書出る？」、運転手「出すよ」と一応条件は折り合ったにもかかわらず、なぜかなかなか出発しようとしません。運転手はおもむろに車から出ていき、他の乗客を探しにいったようです。当時、スマホはありましたが、まだ連絡の手段が今ほど便利ではなかったので、現地で待ってくれているはずのワンさん達にも状況を伝えようがありません。しばらく待つと大学生風の女性を連れて運転手が車に戻ってきました。やはりこの人も一緒に石家庄の市街地まで同乗するようです。タクシーに赤の他人と乗る違和感よりも、「よし、これで外国人一人白タクに乗って、誘拐されることはなくなったな」と変な安心感を覚えます。いよいよタクシーは走り出しますが、余裕で深夜12時を回っており、行けども行けども辺りは真っ暗、山道っぽいところをけっこうなスピードで駆け抜け抜けていきます。あとから調べると空港から街までは50kmほどありましたので、ゆうに小一時間は経過。

「まさか後ろの女の子とグルになって、身ぐるみ剥がされるのか！？」と猜疑心が再び顔を出した頃に、街の明かりが見えてきます。町の外れ（と思われる場所）で先に女性を降ろし、更に10分くらい走ったところで、私の目指すホテルに到着しました。料金と交換に運転手からトランクを受け取り、ホテルに入ると先にチェックインを済ませていた御三方が出迎えてくれました。初めて会うスー社長との挨拶もそこそこに「Mさん、お腹空いたでしょう（既に午前1時頃）」とホテルの隣の屋台に連れ出してもらいラーメンを食べながら、翌日の旅程の相談です。目的の丁場（鉱山）は、ここから約150km離れた隣町の山奥にあり、翌日も1日移動とのこと。

翌朝、ホテル近くの「沙县小吃（福建風軽食店。全国どこにでもある）」で朝食を摂り次の目的地に向かいます。



前日は真っ暗で分からなかったのですが、日が明けて改めて見渡してみると、石家庄の街は結構大きいようです。20年くらい前の泉州の街並みを思い起して頂ければ、中国に行き慣れている方にはだいたい想像がつくのではないかでしょうか。我々一行プラス運転手さんの5人でジープに乗り込み、次の投宿地である隣街・保定市の山奥に向け出発します。

いくつも山越えをしながら進むのですが、途中大型トラックの長い行列に遭遇します。聞くと地場産業である石炭を全国に運び出しているとのこと。そう聞くと心なしか窓の外も霞んでいるように見えます。以前、他の丁場の人聞いた、「石炭の運送は国の基幹物資だから優先されるけれども、石材の運送は後回しにされるんだよ」というのもこの風景を

見れば納得です。道幅いっぱいに走ってくるトラックを路肩で待ちながら、ゆっくり進みます。

石炭 トラック 動画→<https://www.youtube.com/watch?v=0d42TWH-UX8>

夕方前には次の街、河北省・阜平県に着きました。



少しづつ標高が上がっているためでしょうか、気温は肌寒く感じます。

街の様子も山あいの小さめの街といったところ。幸いホテルは古いながらも清潔でホッとしました。

夕食には少し早いので、スー社長宅（賃貸マンション）でお話を伺います。

「このあたりで出た石は、トラックや鉄道を使って天津港まで送り、そこから福建省まで船に積んで送るんですよ。さっき道中で見たようにトラックを手配するのも一苦労なので、やはり味方は多いに越したことはないですよ」

と、意味深なことをニコニコしながら気さくに話してくれます。いい原石を手に入れるための方法をひとしきり聞いたところで、外も暗くなってきたので夕食へ。地元の鍋料理とのこと。

日が落ちるとさすがに寒く、肩を寄せ合いながら細い路地を抜けていくとレストランというより民家のような建物があり、ぞろぞろと入っていきます。小部屋に通されると、中央にタイル張りのテーブル兼暖炉兼調理器具が1台鎮座しています。



テーブルの上には大きな直径80cmくらいの鍋に野菜や肉が入っています。白いのは“うどん”のような麺。



店員さんが火を入れてくれます。薪が逆に斬新です。



しばし待って沸騰すれば完成です。あえて名前を付ければ「河北風山賊鍋」でしょうか。インスタ映えは全くしませんが、おっさん4人で囲むには相応しい料理と言えるでしょう（思い出補正がかかっています）。

身体が温まったところで、翌日の登山に備え早めに就寝です。「遊ぶ」といってもなにか娯楽があるわけでもないのですが・・・。

翌朝。

ホテルを出発し、さらに15kmほど山道を走らせます。

舗装された道からいわゆるジャリ道に入り、いよいよジープの本領発揮！というところで・・・・・・・・。



なんということでしょう。

掘り口から山の麓まで原石を運ぶトラックが、（おそらく過積載ため）横転して道を塞いでいるではないですか。



ジープでの走行は諦め、ワンさんの口癖「俺たちには足が2本あるぜ！」の号令とともに頂上を目指して歩き出す我々。

日頃の運動不足を悔やみながら足を進めますが、体力的な辛さより寒さが堪えます。普段マイナスの気温をほぼ体感していな

い私にとっては、呼吸するごとに痛みさえ感じます。山頂に近づくにつれ風も強くなり、スマホで気温を見ると「マイナス17℃」を示しています。



ついに掘り口に到着です。
写真では分かりづらいですが、
岩肌の黒い部分が採掘してい
る場所で、一般的に

【河北山崎（雪花泥）】

と呼ばれている石になります。

岩脈の幅は20～30メートルくらいでしょうか。掘り進んでは道を広げ、を繰り返しているようです。岩盤から明らかなキズも見えますので、「なかなか難しい石なんだな」と再認識しました。

すでにこの時には雪も降り始めており、手仕舞いの準備。次に再開するのは翌春の氷が解けてからだそうです。

ここ数年、採掘や停止（整理）を繰り返していた河北山崎ですが、今年（2020年）は再開しているとのこと。すでに細目の石も弊社協力工場に入荷し始めておりますので、ご興味がありましたら、ぜひ担当営業員までお問い合わせ願いたいと思います。

次回、山西省編に続く？予定です。9月号もよろしくお願いします。